みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

女性の健康と歴史

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-02-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 七美 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009052

II

女性の健康と歴史

学習目標

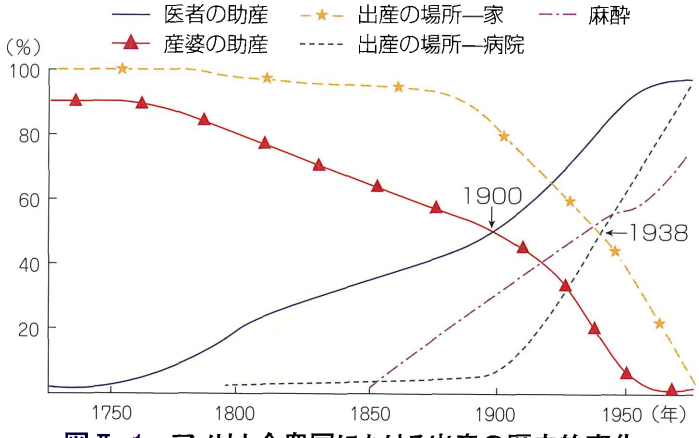
1．女性の健康に関する観念とその実践は，歴史的変化を遂げてきた生活文化の１つであることを理解する．
2．女性の健康のとらえ方は，環境，人間関係，生活様式に関する理想や期待などと深く関連していることを理解する．
3．女性の健康を実現しようとする活動は，教育や福祉など社会における各領域と連動してきたことを理解する．

いま私たちは，女性の「健康」と聞いて何を思い浮かべるだろうか．日本の場合，平均寿命が長いことは世界的に知られているが，少子高齢社会を迎えるなど社会・文化の変動の中で女性のライフサイクルを豊かに充実して過ごしたいと考えると，そこにはいくつもの課題がみえてくる．近年では治療の対象として，「摂食障害」「不妊」「肥満」なども浮上している．高齢社会において各人が豊かな人生をまっとうするということも，ケアのあり方や「健康」との関連で念頭におくことである．

しかし，現代社会では治療対象となる状態が，いつの時代にも「病気」と認識されてきたとはいえない．環境や文化の変化によって新たに憂慮される状況，すなわち新しい病気像が描かれ，医療技術の進展や人々の期待や理想などがあいまって達成される「健康」がイメージされてきたのではないか．したがって女性の健康の歴史をたどることは，ある時代や社会に特徴的な「病気」や「健康」に関する問題やイメージを再考することである．

本章では，女性のライフサイクルの中でも，健康や心身の問題との関連で注目されてきた出産や生殖にかかわる言説と実践の変化を素材として，「健康」「身体観」「人間関係観」を考察してみたい．その際，助産・出産の世界の変化を画期的変動として経験した地域として，18世紀から19世紀にかけてのアメリカ合衆国を主としてとりあげる．アメリカでは，男性の医師が助産を担当するようになると，それまで助産を一手に引き受けていた産婆（助産師）たちの姿が、出産の場から急速に消えていった（図Ⅱ-1）．この合衆国の医療の特徴は第二次世界大戦後の日本にも影響を与えた出産文化をめぐる１つの傾向である[*1]．

以下，１節では出産の近代化以前の女性の健康に関する言説と実践をたどり，２節では出産の医学化過程における変動を検討し，３節ではその変動期に女性の健康をめぐり，いかなる問題が提起されてきたのかを考えていく．４節ではさらに出産と健康にかかわる現代の試みをとりあげる．これらをとおして，女性の健康がいかに構想されてきたのかを社会的文化的背景に位置づけ，さらに人間の「全体性」と「健康」に関しても考察していこう．



図Ⅱ-1　アメリカ合衆国における出産の歴史的変化

出典：Leavitt, J. W.（1986）Brought to bed., p.12, Oxford University Press
（鈴木七美（1997）出産の歴史人類学：産婆世界の解体から自然出産運動へ，p.10, 新曜社より転載）

*1　日本における出産文化と戦後アメリカ合衆国によって行われた指導による葛藤に関しては，参考文献３．大林（1989）参照．

1 女性の健康のコスモロジー

女性の身体や健康は，生物学的に男性とは異なる部分が，子どもを産むことにかかわっていることもあり，古来，注目され，検討されてきた．その男性とは異なる身体器官とその現象とは，子宮と月経，そして胎児を育み，産みだすということである．この特異性ゆえに，女性に特有の病も生じ，またその特異な身体に適合する健康への配慮も必要だと考えられていた．もちろん，女性の健康への配慮が男性のそれとはまったく別の原理によって考えられていたというわけではない．むしろ，身体への配慮としての医学が一般的原理によって構築され実践される際に，その試金石として女性の身体をどう把握すればよいかという問題が，独特な領域として関心を集めたということであろう．いずれにしても，女性の健康を考えるということは，人間という身体への配慮の重要な一部として，女性の身体，人間の生殖，そしてそれにまつわる身体的精神的健康とそれへの配慮を軸にしてきたことは事実である．

また，助産師，看護師，医師，身体改革者など健康にかかわる活動においても，多くの女性たちの活動が知られている．とりわけ，多くの地域で，出産や女性の病気への治療に女性のみがかかわるという習慣がみられたことから，助産師の仕事が注目されてきた．治療の一部として，呪術，占い，祈りといった超自然のパワーを招来しようとする宗教的な色合いを帯びたものや，動物磁気療法（メスメリズム）など環境や人間のもつ力を動員しようという方向性をもつものがみられる．歴史上，治療に多くかかわってきた女性たちは，ときには「賢い女」として，またときには「魔女」として，特別な力をもつ者として頼られ，恐れられ，迫害されることもあった．

① ヒポクラテスによる女性の健康論

女性の健康に関し，古くかつまとまった言説として，医学の祖とうたわれる前5世紀ギリシャの医者ヒポクラテス（Hippocrates）によるとされる一連の文書がある．この文献をひもとくと，そこには地域や環境と心身の特徴，さまざまな病とそれらへの対処，医者の資質などが展開されているが，女性の健康に関しては特に多くが語られている．それらは生殖や出産にかかわる女性の身体と健康を中心に，「婦人の自然性について」「生殖について」「婦人病第一巻」「婦人病第二巻」「不妊症について」「処女の病について」として詳述されている．

1 ミクロコスモス（小宇宙）としての身体

ヒポクラテスにあっては，人間の身体は土・水・気（大気）・火の4元素からなるマクロコスモス（大宇宙）のアナロジー（類比）でミクロコスモスととらえられており，宇宙の構成要素間の共鳴（sympathy）を前提にバランスを保つという点から健康が論じられていた．食養生・運動・夢判断などを論じた「養生論」においては，4元素のうち特に火と水を生命活動の動因として重視し，それらがもたらす温・湿・乾・冷の4性質と人間の身体を構成する血液・黄胆汁・黒胆汁・粘液の4体液とが，自然なバランスを保つことが重視された．

女性の身体は，「婦人病第一巻」によれば，男性のそれよりも湿って温かく，それゆえに温・

湿の性質をもつ血液が周期的に排出されることで身体のバランスが保たれる．それが月経であり，この自然な過程が乱されること，および子宮の身体内での移動が，女性に特有な痛みやヒステリーの原因として論じられることになる．女性の身体や病と健康が生殖器官や妊娠・出産と深く関連づけられていたことをうかがい知ることができる．

2 雌雄二種説

生殖のメカニズムは「生殖について」で論じられている．それによれば，雌雄二種説，つまり女性からも男性と同様に精液が子宮に射出され受胎がなされる．性愛が肯定的に語られ，性交が女性の健康に効果的であることが至るところで言及されることに特徴がある．

ヒポクラテスの雌雄二種説は，2世紀ローマの医者ガレノス（Galenus）を経て，アラビアや中世ヨーロッパに展開をみる．13世紀以降に普及した擬アルベルトゥス・マグヌス（Magnus, Albertus）「女性の秘密」においても，受胎を，「女性は性交において男が射精するとき自分も種子を排出し，この2つが女性の子宮で結合し，混じり合う」と説明している．月経血も少なくとも13世紀までは穢(けが)れ*2とみなされることはなく，出産後月経が止まっている間は月経血が乳白色の乳となって子どもを育てると考えられた．また，18世紀のドイツでも子宮は体内を活発に動き回ると信じられており，健康はその動きと深く連動していると考えられていた．そこでは，女性たち自身が身体の調子と子宮の動きに関し感じるところを医者に語り，医者はその情報をもとに薬物を処方していたとされている[1]．外界と響き合い躍動する身体の声を聴き表現することは，バランスと健康を保つための第1歩だったのである．

② 擬アリストテレスのマスターピース

1 母となる女性の健康術

ヒポクラテスのコスモロジカルな議論の影響は，古代ローマの産科医ソラヌス（Soranus）などを経て，初版が17世紀ロンドンでだされその後19世紀半ばまで欧米で出版され続けた，英語で書かれた初めての一般向け産婆術書「擬アリストテレスのマスターピース（Aristotle's Master-Piece）」（以下,「マスターピース」と略記）にまでみることができる．「マスターピース」は生殖，妊娠，出産，乳児の世話，治療と養生術などを満載した書物である．

生殖と妊娠にかかわる部分には，母となる女性の健康術が子どもとの関連で説かれていた．第1に，母はとる食物に気をつけなければならない．食物の中には，子どもの成長や性格形成に影響するものがあったからである．身体を共有するという**母子一気的な観念**に基づき，産婦の養生術に関する指南が女たちに示されていた．第2に，妊婦の心は穏やかに保たれることがのぞましかった．驚き，恐怖，渇望は，子どもの姿に何らかの刻印を残すことになると考えられていたからである．火事をみて妊婦がおののき恐れれば，痣(あざ)のある子どもが生まれるとされた．こうした言い伝えは日本でも各地で報告されている．さらに，得られるはずのないものを強く求めることは，子どもの身体に障害を引き起こすことがあるとされ，手に入りにくい遠い異国の食べ物などの話を妊婦に聞かせることのないよう，周りの者にも注意が促されていたのである．このように，

妊婦と身体を通じてつながっていると考えられた子どもへの配慮から，女性の心身の健康について注意が喚起され，食物や心に関連する数々のタブー（禁忌）*3が編み出されることになった．

2 「自然の力」による出産

「マスターピース」第2編「熟練した産婆」には身体の「自然」の力を発揮させるための基本的態度が記されていた．第1に出産は病気ではなく「自然」の過程であり，助産は女性の身体の「自然」の力を信じ，これを援助することに尽きるとされていた．産婆は出産の「本当のとき」すなわち「子どもが生まれる準備ができたとき，自然が子どもを前に押し出そうとするとき」を，産婦の「本物の痛み」から見分けて助産しなければならない．「痛み」は「自然の力」を構成する重要な要素ととらえられていた．第2に助産は，「女性の手，鷹の目，そして獅子の心」をもつ者にふさわしい仕事と明記されており，経験に基づく技術，観察力，決断力の重要性が説かれていた．第3に，「出産の椅子」などを用い上体を起こした姿勢で行われた出産において，産婦は「立ち会っている女たち（good women）」に身体を支えてもらうようアドバイスされており，女性たちの協力が不可欠とされていた（図Ⅱ-2）．だが何よりも，産婦自身が「自然」の力で産み落とすことが前提であった．「本物の痛み」に象徴される「自然」の力を養うために，「マスターピース」には食養生を中心とした養生術が展開されていた．

ルエフ『人間の妊娠と出産』（1580）に描かれた，出産の椅子を用いる出産の様子．
背後では占星術師が子どもの運命を占うため，星を観察している．

図Ⅱ-2　女たちが協力する出産の様子

出典：Speert, H.（1973）Iconographia Gyniatrica, F. A. Davis Company, p. 89.
（鈴木七美（1997）出産の歴史人類学，p. 77，新曜社より転載）

*2　タブーないし不浄観は両義的性格，すなわち一方で豊饒性・聖性・能力，他方で不浄・穢れ・危険などを意味することが多い．M. ダグラス（Douglas, M）は，社会的経験を秩序づける際に用いられる境界領域は危険かつ不浄なものとみなされると述べており[2]，不浄観は，男女関係をはじめとする社会内の境界線，ライフサイクルの各段階の境界などと密接にかかわる．

*3　妊娠・誕生にはさまざまなタブーが課せられる傾向がある．以前の状態から新しい状態への過渡期は，死と再生を象徴する時空間として，非日常的なタブーや儀礼に包まれてきた．

③ アメリカ植民地時代の出産文化

1 ウエルカムコンパニオンズ

女性の心身のパワーと出産をめぐる女性たちの協力を記した「マスターピース」が出版されていたアメリカ植民地時代（1493–1776）の出産は，「社会的出産（social childbirth）」と表現されており，「ウエルカムコンパニオンズ」とよばれる女性たちによって構成される世界であった．出産が近づくと家の男たちは産婆を呼びにいき，近隣の女性を呼び集めるため馬を走らせた．出産前後の時期を彼女たちはともに過ごし，食事をつくったり家事の手伝いをしたりして過ごした．病とは異なる自然の過程としての出産を援助し，産婦を元気づけるためスープやハーブティーなどの食事が用意された．

助産において中心的役割を担っていた産婆は専門職者ではなく，経験を積んだ者がその仕事を担当していた．アメリカでは牧師が治療を，そして妻が助産を担当することもみられた．北東部ニューイングランド地方のメーン州の町で産婆として活躍したバラード夫人は9人の子どもを育て，その経験をもって43歳から助産に携わった．

2 通過儀礼としての出産

無事に出産が済むと，産婦主催で「グローニングパーティー」が開かれる習慣があった．「グローニング（groaning）」はテーブルの上いっぱいにうなるほどの料理が供されているという意味で，誕生を祝う女たちの宴である．出産と子育ての経験が女性のライフサイクルにおいて大きな比重を占め，産婦の出産時死亡率も高かった時代に，その節目を無事くぐり抜けたことをともに祝う女性文化の１つであった．こうした女性たちの宴は欧米をはじめ世界各地の習俗の中に広く報告されており[*4]，新生児をこの世に定着させることを念じてその身体を産婆が大地につけてみせるという文化もみいだせる．

産婦の心身のパワーが重視された出産の場は，人間紐帯と自然環境の中に子どもと産婦の生命を安定させ，同時に，共同体に新しいメンバーを迎えることによる人間関係の変動を確認する社会的行事に彩られ，まさにコミュニティにおける通過儀礼[*5]を構成していた．植民地時代の女性たちにとってその場は，健康や身体について語り合い，安否や日常生活のさまざまな情報を交換する場でもあり，女性文化を構成する重要な場であった．

---

*4　シュレスウィック地方では，19世紀まで，子どもが生まれた知らせがあると，村中の女たちが新しい母親の家へ踊りながらでかけ，その後村中を回って大騒ぎするという無礼講が許されていた[3]．

*5　通過儀礼は，ライフサイクルの節目におけるさまざまな人生儀礼をはじめ，社会的な境界を通過するときにみられる．ファン・ヘネップ（Van Gennep, Arnold）は，この儀礼において，日常生活からの分離，過渡，そして統合という３つの側面を指摘している[4]．

2 出産文化の変容と女性の健康

① 19世紀に始まる出産の医学化

1 ナチュラルからノーマルへ

18世紀末以降，アメリカ合衆国では，ヨーロッパに学び帰国した医者たちが大学を設立した．とりわけ女性の健康を脅かしているとみられた出産に関しては，「新しい産科学」による改善がうたわれた．その背景として，19世紀には医師のカルテの中で患者の状態を示す語が「自然な(natural)」から「正常（normal)」に変容したという状況[5]をあげることができよう．出産においても，予測の難しい状況を制御して大差のない安定した過程として実現しようという構想がなされた．

2 器具と麻酔の導入

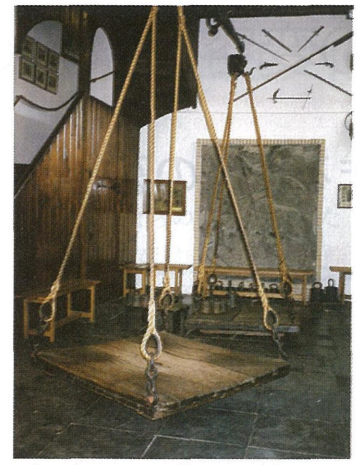
助産の変化にともない使用されるようになった器具は鉗子（かんし）である．これは男性産科医の助産を特徴づけるシンボルともいえよう．鉗子が適用しやすいように助産姿勢も仰臥位産が主流となった．第２に持ち込まれたのは痛みを緩和するアヘンである．これを用いると，女性は自分の力で産むのではなく鉗子に頼らざるを得ない．さらに19世紀半ばから使用されるようになったエーテル麻酔は，その適用を容易にするため，従来産婦の家で行われていた出産の施設への移動を促した．とはいえ，短期間の講義に出席しただけで出産の場に赴いていた当時の男性産科医は，経験豊かな産婆より助産の技術が高いとは限らなかった．鉗子の使用は消毒という観念が確立していない時代に死に至る感染をもたらしていた．19世紀の半ばまで，出産の安全性や男性産科医の助産に関し激しい論争がくり広げられた．

② 産婆の排斥

1 産婆とまじない

産科医の助産という新しい文化に対する多方面からの議論が沸騰する中で，医者たちも産婆の問題点に関し主張する必要性に迫られた．その際の第１の論点は，産婆は知識がなく，まじないを唱えるなど迷信深いという非難である．素人の助産によって女性たちは身体を傷つけられ健康を害されてきたというのである．また，産婆は，特別な力をもつ「魔女」として，迫害されることもあった*6（図Ⅱ-3)．教育という点では，専門職化の道であった大学などほとんどの教育機

*6　ヨーロッパ中世以降の魔女狩りにおいて断罪された者の中には，産婆や治療を行う者たちが含まれていたとされ，研究史上，キリスト教や医療制度における産婆の問題性などが考察されてきた[6]．助産や治療，そして死者の扱いに携わってきた女性の空間的・社会的境界性に関しては，20世紀フランスの一地域の調査においても検討されている[7]．



魔女であるかどうかを見極めるために使用された小麦取引所の秤(はかり).
魔女は空を飛ぶと考えられていたので，一定体重以上であれば，「魔女ではない証明書」が発行された.

図Ⅱ-3　魔女の秤

（アウデワーテル（オランダ），2001年 9 月，筆者撮影）

関は女性に門戸を閉ざしていたため，女性たちは教育へのアクセスがなかった[*7]．実際は植民地時代のアメリカで，迷信を問題視した聖職者コットン・マザー（Mather, Cotton 1663–1728）も身体の危機に際していくつかのまじないを紹介していたが，適切な助産者に関する論点は，教育機関で習得する専門的知識の有無であった.

2 女性の身体的適性に関する議論

第２の論点は，医学や生物学の進展によって男女の身体的適性も解明し得るとされ，それによると女性は外科的処置を含む医療など，激しい心身の緊張を迫られる仕事に向かないというものである．医療や助産に携わろうとする女性は自らの生殖器官を損なうことになると警告がなされた．18世紀から19世紀にかけて，医療や教育に深い関心をよせる人々の注目を集めた脳の科学を標榜した骨相学の知見では，女性は「幼きものへの愛」の器官が男性より大きいとされ，子育てにより適合していると主張された[8)]．同時代には，女性は性的欲望や情熱をもたない「パッションレスネス」であるという説も唱えられ[9)]，家庭を守り子どもの養育に専念することが最も適しているという意見が補強された.

3 都市化と女性の身体の弱体化

第３は，出産は自然の過程だとしても，都市化がいちじるしいこの時代の女性の身体は弱っており，出産を自然の力でまっとうするには十分な体力を備えていないという意見である．この時期には実際，弱々しさが美しさの一要素として賛美される傾向もみられ，上中流階層の女性たち

*7　イギリスでは，さまざまな議論ののち女性が大学に入り医者となる道が開かれる法律が制定されたのは1876年である．アメリカ合衆国では，医学校が女性にも門戸を開いたのは19世紀末で，1894年には18の医学校で女子学生がおよそ10%を占めるに至った.

はコルセットをきつく締め，ときに気を失うことも観察されていた．このように弱体化した女性の出産の痛みと苦しみは病気の症状を呈しており，「出産は病気」として医療の範疇で解決することが妥当ととらえられたのである．

こうした状況で，助産者の変化は急速にほぼ完全に進行した．アメリカの産婆たちは，イギリスなどと比較して格別の異議を唱えず助産の場から消えていった[*8]．変化の過程の初期には助産の場であった産婦の部屋に医者と女性たちはともにいたが，徐々にそこは医者の居場所となった．こうした変化の推進力として，第1に，出産に専門職者としての医者を迎えるのが上中流階層の家庭におけるステータスシンボルと認識されたことがあげられる．第2に，都市化・産業化によって，かつてのように共同体の女性が援助し合う習慣が19世紀半ばには形骸化していたことが指摘できる．出産の医学化の背景には，女性をめぐる社会的紐帯の変動と身体観・健康観の変容がからみ合っていたのである．宇宙と響き合い躍動する身体の自然の力を支援する女性たちの協働によって危機の時でもあるライフサイクルの節目をともに渡っていこうという姿勢は，もはや主流ではなくなったのである．

3 健康な身体を求めて

一方で，出産文化の変容を問題視しオルタナティブを提示する人々もあらわれた．それは，アメリカ医学史におけるポピュラーヘルスムーブメントの中心的担い手であった非正統医療者たちである．出産の医学化に関する議論は，身体の「自然」の力や子どもの誕生をめぐる人間関係を問い直すものでもあった．ここでは，出産と女性の健康に関し特に活発に発言した対照的な2つの運動を比較しつつとりあげてみよう．

① 植物治療運動―産婆の時代再興の試み

19世紀前半期に出産をめぐる専門職化に関し最も激しく批判したのは，植物治療運動（トムソニアニズム）のリーダー，サミュエル・トムソン（Thomson, Samuel 1769–1843）である．トムソンはニューハンプシャー州の農夫であったが，妻の出産を扱った医師の助産に疑問を抱いたことをきっかけに，ハーブ（薬草）と食養生を詳述した「新しい健康へのガイドあるいは家庭薬草医」（初版1822年）を出版し，治療者として各地を巡回した．

1 「自然の友人」としてのハーブ

トムソンが問題としたのは，身体の自然の力が信頼されず，病気治療と同様に瀉血や水銀製剤の下剤，さらに鉗子やアヘンが適用されたことである．瀉血や下剤は，痛みや熱など身体の興奮状態を鎮めるため使われてきたが，コレラなどに有効な対処法をみいだせなかった19世紀アメリ

*8　その理由として，助産にかかわっていた女性の多くが，移民後コミュニティの中で職業としてではなく，ボランタリーに助産を扱うことが多かったことなどがあげられている．

カではより激しく用いられ，患者を死に至らしめることも頻繁であった．トムソンは，医療の専門職化に不満を抱き，健康を保つのは個々人のつとめであるとしてアメリカの伝統である「セルフヘルプ（self-help）」を訴えた．それは彼が「自然の友人」とよんだ大地に自生するハーブや元気をつける飲食物をとることによって，身体に「火」をともし熱・冷のバランスを保つことであった．それらハーブはアメリカ先住民によって伝えられ，鳥のスープや香辛料を加え甘くしたワインは開拓時代のアメリカの人々の身体を温めてきたものであった．トムソンは，かつての経験と治療にかかわる民間知識を蓄え「待ちの姿勢」で助産を行った産婆の時代の「社会的出産」の再興を訴えたのである．

2 「セルフヘルプ」と家庭内出産

だが，拡大しつつあった都市部ではその再現が難しかったので，1835年のマニュアルでは「夫と妻による家庭内出産」を提案し，助産の心得を詳細に夫たちに伝えることになった．植物治療運動は，アメリカ全体の５分の３もの人々に適用されたというほど人気を博し，フロンティアに散らばる人々に牧師や巡回治療者によって伝えられたが，19世紀半ばにはより精緻な理論を医学校で伝えるタイプの新しい代替医療運動に席を譲っていった．

② 水治療運動―完全な健康体めざして

やはり当時の医師の助産を激しく批判していた代替医療運動として19世紀半ばに人気を博したのは，水治療運動（ハイドロパシー）である．ハイドロパシーのリーダーたちは医療教育を受けた専門職者であり，同時期の正統医療に疑問を抱き，より適切な医療の模索を続け，水治療を中心とした養生法を提示し，各地に医学校や水治療所を開設した[*9]．

1 「第二の自然」と養生法

ハイドロパシストたちは，医者の介入のみならず，都市化・産業化のもとで女性たちの生活は変化し身体が弱体化していると観察していた．植民地時代の女性の多くが農業など生産活動に携わっていたが，19世紀半ばの都市の女性たちは主婦として家の中にとどまるか工場で働くことが多くなっていた．女性の健康と教育に関心を抱いたビーチャー（Beecher, Catharine 1800–1878）が全米200もの場所で調査し，多くの都市で「不健康」と感じる女性の割合が増加していると報告した[10]ことも注目を集めていた．ハイドロパシストは，新しい環境のもとで生き抜くため，衰弱した身体の自然の力に代えて「第二の自然」を各人が構築し，「完全」な健康を手にするよう促した．その具体的方法は，水の内外の適用，食養生，戸外の運動などを規則的に行い，医者にかかる必要のない剛健な身体をつくることであった．

---

*9 現在も，水治療は現代医療を補完する代替医療の１つとして認識されており，例えば「小児科学における水治療」（Campion, M. R.（1986）Hydrotherapy in Pediatrics, An Aspen Publication）なども出版されている．

健康によいとされたアメリカ女性と子どものための活動的な服（B～E）と
上流階層やパリの女性たちのコルセットで締めつけたドレス（A）

図Ⅱ-4　服装改革

出典：Gove Nichols, M.S.（1851）A lecture on woman's dresses, The Water-Cure Journal, 12（2），p. 36
（鈴木七美（1997）出産の歴史人類学，p.165，新曜社）

2 権利としての健康

この運動に同調し，「第二の自然」を求める女性たちの主張は一様ではなかった．第1は，「女性の権利」としての健康の構想である．水治療雑誌に掲載された「女性が第一の偉大な権利，すなわち健康への権利を学びこれを要求しなければ，女性の領域が大きく上昇することはあり得ない」[11] という言葉は，同時代の女性参政権運動の闘士たちや服装改革の推進者たちに共感をもって迎えられた．

3 母の帝国と「科学」

第2は，家庭における母と妻としての責任を果たすことをとおして，南北戦争前後の変動する国家や社会に貢献しようという主張である．核家族化が進行する19世紀半ばの時期は「母の帝国」[*10] ともよばれ，母としての女性の役割が強調された．ヨーロッパの上中流階層の女性とは異なり，アメリカの女性には健康を増進する服装が適している，とする服装改革者たちも母と子のための活動的な服をデザインした（図Ⅱ-4）．

ハイドロパシーにおいては，完全な健康体を獲得することは女性の権利であるのみならず，義務としても提示されたのである．それは具体的には，家庭を中心とする生活全体の改良を意味していた．家政学の成立を目指したビーチャーや教育に深い関心を示した医者ウィリアム・オルコット（Alcott, William 1798–1859）などは，水治療を学び生活改革をめざそうとした人々に精力的にマニュアルを供給した．そこで重要だったのは，植物治療運動のようにかつての出産文化を再現することではなく，同時代の先端的な「科学」や「医学」知識を備えることによって，各人

＊10「母の帝国」は，「女性の領域（woman's sphere）」という言葉で包括された家庭内の活動において女性が重要な役割を果たすことを意味していた．その根拠として，しばしば生物学的な説明がなされた[12), 13)]．

が健康の専門職者となることであった．「健康」はさまざまな方向性をもつ女性たちを結びつけるキーワードとなっていった．

4 健康と境界性

19世紀半ば以降，アメリカ医学会も設立され医療専門職化は確立していく．医療と健康のあり方を問い直す大規模な代替医療運動は正統医療にも影響を与え，身体の「自然」の力などに関し議論が続けられた．ポピュラーヘルスムーブメントにおいて関心を集めた「健康」は，19世紀の医師たちが用いるようになった「正常（normal）」という語とも響き合い，達成されなければならない目標としての色合いを帯びていく．それは，近代以降の人間像として提示されている，「健康人」あるいは「衛生人」とも訳される「ホモヒュギエニクス」の一様相ともいえよう[14]．「ヒュギエイア（健康あるいは衛生）」を１つの価値として不断に強迫的に追い求める人々は，「清潔文化」の担い手でもあった[15]．それは，生活文化の多様性を許容しない態度と結びつくこともあった．19世紀半ばには，家族の健康のため母の手料理が推奨されたが，健康への志向を共有しているとは限らないという理由で新移民や階層・宗教が異なるとされた料理人や乳母を排除する言説もみられた[16]．共通目標としての「健康」はときに人々の間に境界を浮かび上がらせ，差別や排除という傾向をもたらすこともあるといえよう．

4 自分らしさの選択と健康

① 20世紀の自然出産運動

19世紀後半には，助産者の産婆から医者への交代，産婦の家から病院へという施設の変化がほぼ進行した．だが，20世紀には，再び出産を自らの手に取り戻そうという声が上がった．それは「痛み」の意味や対処法，誕生をめぐる人間関係を再考するものでもあった．

1 痛みへの対処法

1930年代には，イギリスの産婦人科医ディック＝リード（Dick-Lead, Grantly）によって書かれた「出産はこわくない」がアメリカで人気を博した．ディック＝リードは，母親となることは女性の真の自己実現であると述べ，出産を恐れていると痛みを強く感じるので，よりよい体験としての出産を実現するため筋力を増加し呼吸法を学ぶことをすすめた．1950年代から1960年代にかけてアメリカでは「母親であること（motherhood）」がしばしば話題となり，大学を卒業した女性たちが仕事を離れて家庭に入り，一時出生率は急上昇した．

1959年には，パリでラマーズ法によって出産したアメリカの女性が書いた「ありがとう　ラマーズ先生」が版を重ね，速く浅い呼吸によって痛みを減じるというフランスの医師フェルディナ

ンド・ラマーズ（Lamaze, Ferdinand 1890–1957）の方法が注目を集めた．ラマーズ法はさらに，子どもの誕生を家族とともに迎えたいという願いにもこたえるものとして発展した．女性が一生に産む子どもの数が減少し，ライフサイクルにおいて特別の経験となりつつあった出産のあり方は，自分らしい生活構想の重要な一要素として，自らデザインしていくものとして注目された．

2 人間の全体性への問い

こうした動きは，20世紀後半以降の心身をめぐる近代化に関する問い直しの傾向とも関連していよう．「脱病院化社会」の中でイヴァン・イリイチ（Illich, Ivan 1926–2002）が警鐘を鳴らしたように，専門職化の果てに隠蔽されてしまう生や死の体験への不安が吐露され，科学技術の発展のみでは解決され得ない領域にどう対処するのかに目が向けられた．完全な健康体に象徴されるような，ただ1つの価値のみを追い求めるだけでは人間の全体性を包括できないという予感の中で，どのようなライフサイクルを構想するのかが検討されてきたのである．

② 生活様式としての健康

1 身体の力を蓄える暮らし

出産に関連して身体の自然の力を考えるという傾向はアメリカのみならず各地で観察されてきた．例えばスイス北東部アッペンツェルでは，病院出産において会陰切開などの介入が頻繁になされることに反発した助産師が自宅で助産所を開き，妊婦は助産師とともに野菜を育て働きながら身体の調子を整え出産してきた．この助産師は，労働し自分の手でつくったものを料理し食べることを丹念に行うことをとおして，ライフサイクルにおける不調に対処し健康を享受することを主張してきた（図Ⅱ-5，図Ⅱ-6）．彼女のキャロットジュースやオートムギとポテトのスープなどは，野菜そのもののほのかな塩味や甘さを思い出させてくれる．スイスの中でも伝統を守り続ける山間の小さな町の助産師の実践はメディアをとおして広く知られ，各地から山の日常生活の

図Ⅱ-5　スイスの助産師オッティリア・グルーベンマンと自宅の野菜畑
（アッペンツェル（スイス），1997年9月，筆者撮影）

図Ⅱ-6　グルーベンマンの自宅で行われる出産を援助するための道具一式
（アッペンツェル（スイス），1997年 9 月，筆者撮影）

中で体力を充実させることを願って女性たちが訪れている．

とはいえ，この助産師だけが特別な考えをもっているわけではない．現代医療を行うスイス北部のザンクトガレン州立病院でも，自然に進行している出産は助産師たちの手に委ねられる．そうした出産を経験してきたスイス北東部の女性たちへのインタビューでは，健康で充足した生活を考える上で，仕事や家事，家族との時間，そして自然と触れ合う機会をどのように調整していくかが最も関心のある事柄としてしばしば語られた．この地は，2000年の住民投票で「女性の体外における生殖は認容できない」および「人為的な生殖のための第三者の生殖細胞を用いることは認容できない」という新生殖医療に関する発案についての賛否が問われたことでも知られている．この厳格な発案は僅差で否定されたが，住民の「自然」や「神」などに関する信念に配慮して，ザンクトガレン州立病院でも夫の配偶子を用いる場合のみに限定して生殖医療を行ってきた[17]．ここでは，高度の医療技術をどこまで適用するのかも，ライフスタイルの問題として一般の人々の関心を集めているようだ．

2　現代医療と伝統的方法の融合

現代医療と伝統的方法の融合の試みは，現代医療機関の外部のみにみられるわけではない．生殖補助技術を誇るザンクトガレン州立病院でも，こと出産に関しては，古くからの習俗や技術を応用している．水浴出産をのぞむ産婦にはゆったりした水色のプールが用意され，その中心にはやはり水色の綱が垂れ下がり，歴史上世界各地でみられた綱につかまって出産することが可能となっている．

安楽死というかたちで生命の終わりに関する選択が可能となるなど，医療やライフサイクルにかかわる試みが活発に行われてきたオランダでも，生命の誕生の瞬間に関しては助産所における出産が主流である．助産師たちが集う助産所では，ヨーロッパ中世さながらの「出産の椅子」を使った出産が行われている（図Ⅱ-7）．たくさんの子どもたちの写真が貼られた待合室では，その成長をも時間をかけて見守り続ける助産師たちのコメントを聞くことができる[*11]．

*11　2001年9月，オランダ，ハーレムの助産所における聞き取り調査に基づく．「問題のない出産の場合」，助産師は，かかりつけ医の役割をはたし，助産師や助産所の活用は，医療費をおさえることにおいても重視されている．

図Ⅱ-7　オランダの助産師が使用している出産の椅子
（ハーレム（オランダ），2001年9月，筆者撮影）

こうした例にみられるように，1970年代以降世界各地で，現代医学の知識および全体としての人間のあり方を調整し連動させる試みがさかんである．身体の自然の力を感じつつ，ライフサイクルをわたっていくにあたって，環境との関係，人間関係の紐帯，心身のバランスなどをともに考察することが，いつの日も変わらない課題であろう．

出産のあり方への問いかけをたどることによって，女性の身体や健康へのまなざしが，社会の構成や諸問題と深く関連しまた歴史的変容を経てきたことが浮かび上がった．変動の波の中で，女性たちとその健康にかかわる人々は同時代の自然観，科学や進歩に関する観念，人間関係観，そして理想とする生活様式などの影響を受けつつ，ゆれ動きつつ歩んできた．

治療や養生にかかわってきた女性の活動は，治療（キュア）するだけでは充足できない，ウェルビーイングや健康を考える上で重要な観点である，「看護すること（ナーシング）」や「ケアすること（care）」の意味と意義を検討する材料を豊かに与えている．女性の身体や健康に関し歴史をたどることは，人々が人間をどのように把握してきたのかを問い直すことであり，看護やケア活動に関し考察を深めることは，人間が互いに配慮しかかわりつつ生きる可能性に関し検討する人間文化研究に拓かれているのである．

WHO（世界保健機関）はその憲章で，「健康とは，単に病にかかっていないことのみならず，身体的，精神的，社会的によい状態にあること」とし，「人種，宗教，政治的信念，経済的・社会的状況にかかわらず，それがすべての人々の基本的人権である」と宣言している．とはいえ病と健康は，個人の願いと権利，社会の福利厚生が交錯する舞台でもある．

医療技術の進展は，私たちにかつてない可能性を与えてくれる一方で，女性の健康に影響を与える問題も引き起こしている．例えば，腎移植など臓器移植が行われる場合，人種・民族，階層，性差などにまつわる政治的・社会的・経済的関係性があらわになっている．臓器提供が報酬をともなう形をとっている場合，夫ではなく妻が臓器提供者となる場合も世界各地で報告されている．性によって異なる経験と心身の負担の問題も指摘できる．近年，薬の開発によってHIV/AIDSの発症を防ぐことが可能となってはきているが[*12]，次世代に与える影響への憂慮から妊娠・出産などに関しても継続的に指導が行われる場合もある．発症せず暮らすことができても，健康に関す

*12　HIV/AIDSの薬は，特許との関係で安価に供給できるとは限らず，その薬を手に入れられる者のみに治療の可能性が開かれているのが現状である．こうした状況に対処するため，近年，例えばタイ王国では自国で薬を生産する試みがなされている．

る問題へのかかわり方やその負担において性差がみられるのである．また医療技術の発展にともない，新たに治療可能な分野として注目されるようになった「不妊」という状況は，女性たちに希望を与える一方でさまざまな選択を迫っている．そこには，生命倫理，宗教，家族関係，生まれてくる子どもの親を知る権利などに関する複雑な議論も絡み合っている．さらに少子化にかかわる問題提起や各国の対処は，国家の人口調整の要として社会的に認識される女性の身体を再び浮かび上がらせている．女性の身体や健康は自己実現の願いと社会的認識の葛藤が展開する地平でもある．

先端的技術を誇る現代社会においてもなお「健康」に関しては不安定な運命にさらされ続け，ライフサイクルの途上では弱き者として生きることも避けがたい人々の全体としての生き方を考察するにあたって，多様な問題群を包括する女性の健康の歴史に関し問い続けることは不可欠の課題である．

引用文献

1）バーバラ・ドゥーデン，井上茂子訳（2001）女の皮膚の下：十八世紀のある医師とその患者たち 新版，pp. 77-140，藤原書店．

2）メアリ・ダグラス，塚本利明訳（1972）汚穢と禁忌，pp. 218-243，思潮社．

3）ミルチャ・エリアーデ，堀一郎訳（1971）生と再生：イニシェーションの宗教的意義，p. 100，東京大学出版会．

4）アルノルト・ファン・ヘネップ，綾部恒雄，綾部裕子訳（1995）通過儀礼，p. 9，弘文堂．

5）Warner, John H.（1986）The therapeutic perspective: medical practice, knowledge, and identity in America, 1820–1885, pp. 85-91，Harvard University Press.

6）バーバラ・エーレンライク，ディアドリー・イングリシュ，長瀬久子訳（1996）魔女・産婆・看護婦：女性医療家の歴史，pp. 17-29，法政大学出版局．

7）イヴォンヌ・ヴェルディエ，大野朗子訳（1985）女のフィジオロジー：洗濯女・裁縫女・料理女，pp. 83-153，新評論．

8）鈴木七美（2002）癒しの歴史人類学:ハーブと水のシンボリズムへ，pp. 126-129，世界思想社．

9）Cott, Nancy F.（1978）Passionlessness: An Interpretation of Victorian Sexual Ideology 1790–1850, Sings, 4, pp. 219-236.

10）Beecher, Catherine E.（1872）Woman's Profession as Mother and Educator, with Views in Opposition to Woman Suffrage, pp. 211-218，Maclean, Gibson & Co.

11）Austin, Harriet N.（1853）Woman's Present and Future, Water-Cure Journal, 16, p. 57.

12）鈴木七美，綾部恒雄編（1997）アメリカの女性：自己実現のファンタジー，女の民族誌2，pp. 169-194，弘文堂．

13）Ryan, Mary P.（1985）The Empire of the Mother: American Writing about Domesticity 1830–1860, pp. 19-43, Harrington Park Press.

14）アルフォンス・ラービッシュ，市野川容孝訳（1997）文明化の過程における健康概念と医療，思想，（878），pp. 121-153.

15）ジョルジュ・ヴィガレロ，見市雅俊監訳（1994）清潔になる〈私〉：身体管理の文化誌，同

文館出版.
16）池上良正ほか編，鈴木七美（2004）ダイエット・コスモロジーの近代：食と健康，岩波講座宗教７ 生命：生老病死の宇宙，pp. 213-239，岩波書店.
17）鈴木七美（2003）新生殖技術への社会文化的対応の国際比較（1）スイス・フランスにおける実践と諸問題，人間・文化・心，京都文教大学人間学部研究報告，第５集，pp. 1-24，京都文教大学人間学部.

参考文献

１．アルベルトゥス・マグヌス，立木鷹志編訳（1999）大アルベルトゥスの秘法：中世ヨーロッパの大魔術書，河出書房新社.
２．イヴァン・イリッチ，金子嗣郎訳（1979）脱病院化社会，晶文社.
３．大林道子（1989）助産婦の戦後，勁草書房.
４．鈴木七美（1997）出産の歴史人類学　産婆世界の解体から自然出産運動へ，新曜社.
５．江渕一公，松園万亀雄編，鈴木七美（2004）病の人類学：人間の多様性と共生，文化人類学：文化的実践知の探求，放送大学教育振興会.
６．前掲書５．癒しの人類学“全体性（wholeness）”の希求.
７．田中雅一，中谷文美編，鈴木七美（2005）生む：生殖観と子供観の変容，ジェンダーで学ぶ文化人類学，世界思想社.
８．大槻真一郎編集・翻訳責任，ヒポクラテス（1987）ヒポクラテス全集，第２巻，エンタプライズ.
９．フランソワーズ・ルークス，福井憲彦訳（1983）〈母と子〉の民俗史，新評論.
10. Gélis, Jacques（1984）L'arbre et le fruit: La naissance dans l'Occident moderne XVIe-XIXe Siècle, Librarie Artheme Fayard.
11. Golden, Janet（1996）A Social History of Wet Nursing in America, From Breast to Bottle, Cambridge University Press.
12. Ulrich, Laurel T.（1990）A Midwife's Tale: The life of Martha Ballard, Based on Her Diary 1785–1812., Alfred A. Knopf.
13. 綾部恒雄，桑山敬己編，鈴木七美（2006）医療と文化，よくわかる文化人類学，ミネルヴァ書房.
14. 綾部恒雄編，鈴木七美（2006）医療身体論，文化人類学20の理論，弘文堂.
15. Leavitt, Judith Walzer, ed.（1984）Women and health in America., The University of Wisconsin Press.
16. バージニア・G・ドラックマン，依田和美編，稲田依久監訳（2002）ホスピタル・ウィズ・ア・ハート：女性のための女性による病院の物語，明石書店.

学習課題

1．日本および世界各地における妊娠・出産にかかわる習俗や習慣の歴史に関し情報を収集してみよう．
2．妊産婦や援助者の活動，出産の場所などにかかわる議論や実践の情報を広く収集し，その特徴を整理し，現代日本社会においてどのようなヴァリエーションの可能性があるか，考察しよう．
3．子どもの誕生をめぐる新しい医療技術に関する議論や実践の情報を広く収集し，家族のありかたや，誕生する子どもや周囲の人々のステイタスなどの人間関係，生命倫理に関し，論点を整理してみよう．